

新年特別講演会 平成29年1月

# ミッドウェー海戦の敗因を探る

竹村 紘一



戦いが行われたのは昭和17年（1942年）6月5日～7日にかけてであった。

海戦の契機となったのは、1942年（昭和17年）4月18日にアメリカ軍により行われた初めての日本本土空襲（ドーリットル空襲）であると考えられている。

この時期の日本は東南アジア方面にて破竹の勢いで進撃を続けており、連戦連勝の絶頂期であった。各方面の戦闘で勝てないアメリカ軍は、日本国民に動揺を与えるためと味方の士気を高めるために大胆な帝都空襲計画を企てたのであった。陸上爆撃機を航空母艦から発進させるという途方もない計画であり勝ち誇る日本軍に一撃を与えたいとする、アメリカ側の執念が感じられる作戦であった。ホーネットを飛び立った16機のB25は東京・横浜・川崎・名古屋等を爆撃し中国本土へと飛び去ったのである。

勝ち戦の続く日本は、まさか本土に爆撃を受けるとは思っていなかったため、十分な防衛が行えず、軽微ではあるが被害を受けた。しかし、この作戦は日本国内に大きな動揺を与えた。最も危機感を募らせたのは、連合艦隊司令長官山本五十六であった。

被害自体は軽微ではあったが、本土を攻撃された山本長官をはじめとする海軍は、アメリカが日本空襲に際して中継基地に利用しているミッドウェー諸島の攻略を計画することを考えた。帝都爆撃されることは二度を有ってはならないことであった。

山本は、開戦当初は日本優位に戦いが進むが、時間の経過と共に日本が劣勢に陥ることを予測し、アメリカ軍に大勝しアメリカ国民の士気を阻喪させた時点で、講和を企図していたとされている。この山本の意図は真珠湾が宣戦布告前の奇襲であったとされ、英国の強い要請を受けて、ナチスドイツとの戦いを密かに決意していた米国ルーズベルト大統領は、日本軍の卑怯な奇襲であるとして国民の世論を煽り、従来のヨーロッパ戦線に不介入とする国論を改めさせたのであった。日本側に先に手を挙げさせんとする政治的謀略があったのではないかとされる所以である。

山本は、ミッドウェー諸島はアメリカ側にとって戦略上、重要な要所であるから、ここに攻撃を仕掛ければ、アメリカの主力艦隊が応戦してくる筈であり、この主力を叩いた時こそ、講和に持ち込む最大のチャンスであると考えていたようである。

しかし、本土が空襲を受けたことで作戦実行の時期を急ぎ過ぎたとも言われており、これが、艦隊に十分な準備期間が無くまた、連戦連勝の勝利から自信過剰となり、杜撰な情報管理となり、綿密・慎重な作戦が取れない事態を招いた。

日本は艦隊をいくつかに分け、南の要所であるミッドウェー諸島と共に、北の要所アリューシャン

諸島も攻略しようと考えた。しかし、この日本の計画をアメリカは暗号解読により、事前に察知していた。

日本軍のミッドウェー諸島侵攻を知ったアメリカは、その総力を結集し、ミッドウェー島の防備を強化すると共に、残存の機動部隊を出撃させて日本軍を待ち受けたのである。

アメリカ機動部隊が出て来ないと誤断していた日本軍はミッドウェー諸島に到達、周囲にアメリカの艦船を探すが、見つけることは出来なかった。アメリカ艦隊が出て来ないだろうとの予測があったため、索敵行動が杜撰で不十分であったのである。潜水艦によるハワイの状況偵察も杜撰でありアメリカ艦隊の出撃を見逃していた。アメリカ側は空母エンタープライズとホーネットの他に、先の珊瑚海海戦で大破した空母ヨークタウンをハワイでの突貫工事で90日は要すると見込まれていた修理を三日間で修理し強引に出撃させる凄まじい闘志を見せていた。出撃後も修理を続けていたという。アメリカ海軍は、すでにこの年のはじめには空母サラトガが日本海軍潜水艦の攻撃で損傷し、この海戦でレキシントンを失ったため、次のミッドウェー海戦で戦力を100パーセント発揮できるのはエンタープライズとホーネットだけという苦境に立たされた。しかし損傷したヨークタウンは真珠湾に帰港し、復旧には三ヶ月はかかるであろうと診断された損傷を不眠不休の突貫工事で応急修理、数日で戦闘可能な状態に復帰させ、アメリカ本土へ後退したサラトガの艦載機を載せてミッドウェー沖に出撃させた。日本側の瑞鶴はほぼ無傷であったが、艦載機やベテラン搭乗員が多く失われていたが、無理をすれば出撃は可能であったが、出撃はしなかった。両軍の意気込みの違いがわかってきた。

一方の日本軍は、周囲に敵艦隊が存在しないとすれば、空母に敵艦隊出現に備えて待機させていた雷撃機に積載された魚雷では意味がないとして、魚雷を陸上用爆弾に積み替える作業を開始した。この頃に、漸く索敵機より敵空母発見の報が入ったのである。予想もしない敵空母出現で旗艦赤城の司令部は困惑した。第一次ミッドウェー攻撃隊より第一次攻撃が不十分で第二次攻撃の要ありとの連絡を入れて来たことも大きかった。この状況を見た空母蒼龍・飛龍の指揮を執る山口多聞少将は、司令官の南雲中将に対して、待機している陸上用攻撃機の発進を急ぐよう進言した。敵空母の甲板を破壊するのであれば陸上爆撃機で十分でなによりも攻撃を急がねばならないと考えたのであった。それほど事態は切迫していたのである。

しかし南雲中将はこれを却下し、上空に着艦待機している帰還して来た第一次攻撃隊の収容を優先させた。南雲の幕僚も全てが同じ意見であったという。幕僚も空母同士の戦闘には不慣れで経験がないので航空出身の源田参謀に一任する感じで南雲も指導力を発揮することはなく源田参謀のいいなりであったと言われている。源田自身も戦闘機のパイロットとして名を馳せてはいたが、航空戦の経験はなかった。

これにより日本軍の攻撃は大幅な遅れ、守勢一方となり、作業中の甲板には爆弾や魚雷が無防備に置かれており、アメリカ軍の奇襲により日本は瞬時に主力空母三隻（赤城・加賀・蒼龍）を失うことになった。低空で敵攻撃機の襲来を防いでいた日本軍の零戦も防戦に大童で遙か上空に現れた急降下爆撃機に気付くのが遅れたのであった。上空の警戒が不十分であったのである。索敵にしる対空防御にしる、何もかもが不十分であったのである。開戦以来の連戦連勝による油断と慢心が大いなる原因であった。

その後、唯一残った空母飛龍を率いた山口多聞海軍少将は、独断で反撃の指示を出し、敵空母ヨークタウンを大破（撃沈と誤認）するものの、敵機の攻撃を受けて、乗員を避難させた後、艦長と共に母艦と運命を共にしたのであった。

この空母四隻、そして多くの艦船や歴戦のベテラン搭乗員を失ったことにより、日本は撤退を余儀なくされ、ミッドウェー作戦は完全に失敗に終わった。太平洋戦争の天王山ともいべき海戦で、太平洋戦争の流れを変える運命の海戦となったのである。

## 敗因の原因

日本には防衛研修所戦史室（現在の防衛省防衛研究所戦史部の前身）が編纂した「戦史叢書」という全 102 巻にも及ぶ太平洋戦争について書かれた公刊戦史があり、その第 43 巻が「ミッドウェー海戦」として出されている。

この本によると次の 6 項目が大きな日本軍の敗因として取り上げられている。

●**情報戦での大敗。**日本海軍の暗号が解読され、米軍は日本軍の計画を察知していたのに、日本軍は敵情がよくわかっていなかった。

●**心のゆるみ。**開戦以来の戦果から心にゆるみが生じ、作戦の計画と実行に慎重さを欠いた。機密保持が守られず軍港では次はミッドウェーとの噂が公然と広がっていたという。

●**直前に行われた空母同士の海戦であった珊瑚海海戦で種々の問題が浮き彫りになったが、その分析や反省が全くなされていない。**本海戦は、緒戦の連戦連勝の中での初の挫折であり、第四艦隊司令長官井上成美は、開戦自体は日本軍有利に終わったが、本来の使命であったポートモレスビー作戦の延期、また戦果拡大を図る追撃を中止したことを理由に、権威を損なう臆病風、攻撃精神の欠如と中央や連合艦隊司令部の指導者から非難された。軍令部や宇垣纏連合艦隊参謀長はおろか、連合艦隊司令部、山本五十六連合艦隊司令長官、永野修身軍令部総長からも批判を受け、最終的に昭和天皇から「井上は学者だから、戦は余りうまくない」と評された。嶋田繁太郎海軍大臣に至っては井上の将官人物評で「戦機見る明なし。次官の望みなし。徳望なし。航本の実績上がらず。兵学校長、鎮長官か。大将はダメ」と酷評した。土肥一夫少佐によれば、連合艦隊司令部の電報綴には井上と第四艦隊に対する罵倒の赤字が書き殴られていたという。軍令部や連合艦隊司令部の傲慢と不勉強の責任は極めて大きい。良い面だけを強調し都合の悪いことは伏せる傾向がある。突き詰めて考え抜く、論理的思考が欠け、合理的科学的発想が不足。珊瑚海海戦が後の歪んだ大本営発表の嚆矢となるのである。

●**山本長官の出撃。**山本長官が戦艦大和に座乗して出撃したので、その位置を秘匿するため、無線の使用が制限され、作戦指導に支障を生じたとの説がある。高性能のレーダーを保持する「大和」では米国海軍の出撃情報を受信しているのに、南雲艦隊に伝えなかった。出撃前、南雲の参謀長草鹿龍之介が「赤城の受信能力は低いので、大和で受信した情報は即連絡してほしい」と申し入れていた。南雲艦隊がアメリカ機動部隊出撃を知っていたらそれに備えることも出来たであろう。長官の身の安全を優先させたのであろうか。大和の出撃は戦略上余り意味がなく無駄であったとの見方もされている。

●**敵機動部隊を誘いだしそれを捕捉撃滅するのが本来の作戦の主要目的であったにも拘わらず、索敵活動が杜撰で敵空母の動静を見失い、ミッドウェーに出て来ないものと臆断したのが最大の敗因であった。**

早くに敵空母を発見していたら、当時の南雲艦隊は 天下無敵に機動部隊であったので大勝していたことであろう。

●**航空戦様相の事前研究、訓練の不足。**索敵、偵察、報告などの地道な訓練及び、空母の被害局限対策の研究が足りなかった。

●**5 日の航空決戦の指導の誤り。**二度の兵装転換によって弱点を作った。それまでに、世界戦史上

も空母同士の戦いが無かったので、その場合には先に発見して敵の甲板を破壊するのが最重要であることを知らない指揮官が多数いた。

●戦艦主兵思想の転換の不十分。戦艦部隊が後方遠く離れて航空決戦には全く寄与出来なかった。

因みに、ニミッツ太平洋艦隊司令長官は戦後に出した著書の中で、「勝利は主として情報による。・・・日本軍は奇襲を試みようとして日本軍自体が奇襲された」と述べている。また日本軍が空母戦力を分散してアリューション作戦を行った事を批判し、その戦力分散が無ければ米艦隊が敗北していた可能性があるとも述べている。

また、アメリカ海軍公刊戦史を編纂したサミュエル・エリオット・モリソン少将はミッドウェー海戦について、日本の空母が最も脆弱な状態の時に、米爆撃隊が偶然に日本の空母を発見し攻撃出来たという、幸運に恵まれた事から「100秒足らずの時間に起こった事実の相違で、日本軍はミッドウェーに勝ち、太平洋戦争にも勝利をおさめたかもしれない」と日本軍にも勝利の可能性が十分あったことを述べています。

英国の著名な戦史家リデルハートはその著書で日本の敗因について、十分な数の索敵機を出さなかったこと、戦闘機の援護不足、空母の防火対策が不十分、空母での兵装転換時に敵に向かって航行したこと等、他にも色々指摘しているが、最後は「・・・これらの過失は自信過剰から生じたと言っても過言ではない」と述べており、日本軍の「自信過剰」を問題視している。

私は、夙に指摘されていることではあるが、以下を付け加えたい。

### ●海軍の人事政策の誤り

海軍兵学校卒業時の成績を重視して人事を決めることが一般であり、いわゆる適材適所の人事がなされていない。これは海軍に限ったことでなく日本の官庁にも蔓延していた。人事の安定性は確保出来るかも知れないが非常時には役に立たないことが多い。

それに比し、アメリカ海軍は適材適所の抜擢人事が頻繁に行われて効果を挙げた。ニミッツの功績は極めて高いといえよう。

太平洋戦争時の海軍の主な将領たちと卒業年次

32期：山本五十六・吉田善吾・塩沢幸一・堀悌吉

33期：豊田副武

34期：古賀峯一

36期：南雲忠一

37期：井上成美

38期：栗田健夫

39期：伊藤整一

40期：宇垣纏、山口多聞、大西瀧治郎

41期：草鹿龍之助

52期：瀧田美津雄・源田実

### ●責任の所在を不明確にする兵学校エリートの仲間意識

身内に甘く信賞必罰の基本が守られていない。

### ●珊瑚海海戦に学ぼうとしない傲慢

海戦の戦訓として、綿密・迅速・正確な索敵が死命を制すること、アメリカ海軍機動部隊の迎撃戦闘

機と対空兵器は威力があり、その対策が必要なこと、米急降下爆撃機は気づかぬところから急に爆弾を投下してくる恐れがあり、命中率も低くないことなど、日本海軍が直ちに取り入れるべき戦訓が多数あった。しかし、軍令部や連合艦隊司令部は司令官の井上成美を弱将と根拠なく侮り珊瑚海海戦を軽く見た海軍首脳部は、海戦の内容を良く調べようとせず、貴重な戦訓はほとんど省みられずに放置され、ミッドウェー海戦でその高い代償を支払うこととなった。

アメリカ太平洋艦隊司令長官のニミッツ大将は後年の著書の中でこの海戦を次のように評価している。戦術的に見るならば、珊瑚海海戦は日本側にわずかに勝利の分があった。・・・・(中略)・・・・。しかし、これを戦略的に見れば、米国は勝利を収めた。開戦以来、日本の膨張は初めて抑えられた。・・・・(中略)・・・・。さらに重要なことは、損傷を受けた空母「翔鶴」の修理と空母「瑞鶴」の飛行隊再建の必要から、これら両艦ともミッドウェー海戦に参加できなかったことである。両空母がミッドウェー海戦に参加していたならば、この海戦の成果に決定的な役割を充分果たしていたであろう。

(了)